

安養寺濕原の植物群落に就いて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-02-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 香室, 昭円, 斎藤, 寛昭, 堀, 民男 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00065305

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



香室昭円※
齋藤寛昭
堀民男

安養寺濕原の植物群落に就いて

S. Kamuro, H. Saito & T. Hori: On the Plant Communities of the Moor of Annyôji

本調査は、筆者等に依る福井県を中心とした濕原の植物群落学的調査の一部であり、特に、本濕原は、海拔 140m に過ぎない低地出現のミズゴケを優勢種とするもので、ここに見られる植物景觀は実に興味あるものがある。而して本調査は、1951年の11月から1952年10月迄の一年間に亘つて行われたものであつて、ここにその概略を報告する。

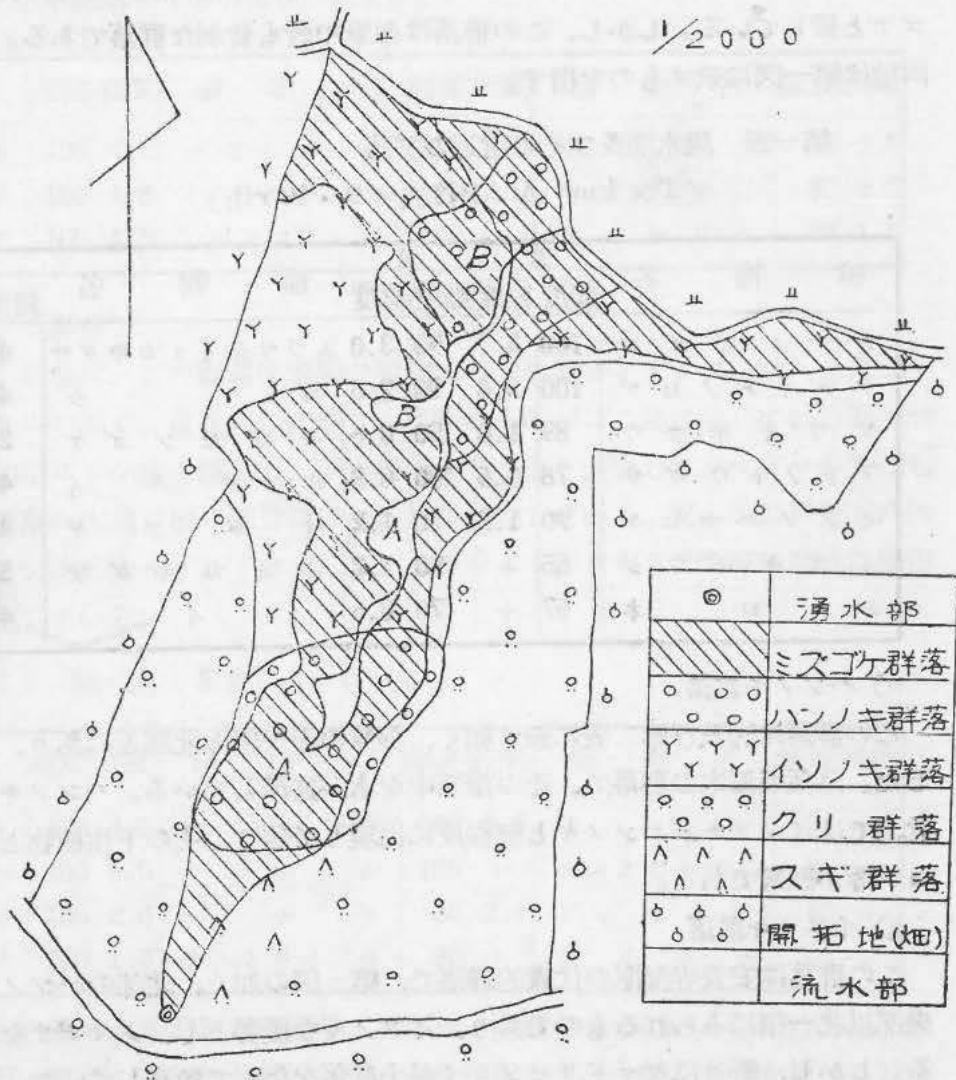
I 場所及び調査方法

安養寺は福井県丹生郡白山村の一山村で、この部落から更に 600m 位西方に此の濕原がある。海拔は 140m で、濕地の北側は水田に接し、これより南側に向つて緩傾斜をもつて上昇し、道路を経て山林に連なる。又、東西両側は近年開墾せられた畑地に連つているが北西部は尙濕地性の落葉灌木が繁茂している。調査範囲に入つた濕地の大きさは、南北 180m、東西 80m で

殆ど全区域をオオミズゴケが被つている。この附近一帯は第三紀層に属し花崗岩を基盤とし、それを薄い石英粗面岩層が被つている地層から成つている。濕地周辺の土壤は黄褐色の粘土質であるが、濕地内は黒褐色を呈し、一部泥炭化している。

この濕地全域は常に水で飽和されているが、この水源はオオミズゴケ分布の最高地、即ち、南側の道路から

図一 安養寺濕原植生分布図



※ 福井大学学芸学部生物学教室

2 m位降りた所から湧出している。尙、湿地表土のPHは4.0~4.2、湧水のPHは5.2であった。

調査方法としては先ず植生分布図を作り、更に1 m或は5 mのクオドラート法により、各優勢群落の精密調査を行った。その植生分布は、第一図の通りである。

II 植物群落

A オオミズゴケ群落

この群落は湿地の主要部を占め、湧水点より扇状に分布し、その上層に31科67種の植物が生じ、特にアカマツ、イヌツゲは広く散在している。而して、この中次の三つの群落が区別される。

a) 流水部及びその附近の群落

この群落は第一表に示す様に、草本植物の群落であり、流水内にはイ、コマツカサススキ、ホタルイ、矮小なヨシ、更に、水量の豊かな所では、ヒルムシロ等が生じている。その周辺部はシロイヌノヒゲ、アリノトウグサ、イヌノハナヒゲ、シロネ、サワギキョウ、ミミカキグサ、ムラサキミミカキグサ、モウセンゴケ等が生じ、特にシロイヌノヒゲ及びアリノトウグサが優勢で、流水部を中心として略帯状分布を示して居り、これらがオオミズゴケと接している。しかし、この群落は湿原中最も貧弱な群落である。尙、第一表のA B両地は第一図に示すものを指す。

第一表 流水部及びその附近の群落

(1×1 m A・Bは夫々9・10ヶ所)

植 物 名	A		B		植 物 名	A		B	
	頻度	被度	頻度	被度		頻度	被度	頻度	被度
オオミズゴケ	100	3.3	90	3.0	ムラサキミミカキグサ	45	+	70	+
シロイヌノヒゲ	100	2.4	90	2.6	ヨシ	45	+	70	+
サワギキョウ	89	1.0	90	0.6	モウセンゴケ	22	+	80	+
アリノトウグサ	78	0.6	100	0.9	ホタルイ	45	+	50	+
イヌノハナヒゲ	90	1.8	70	1.2	イヌツゲ	45	0.5	40	0.5
ミズギボウシ	55	+	90	1.2	ミミカキグサ	33	0.6	50	1.2
シロネ	67	+	70	0.6	イ	45	+	20	+

b) ハンノキ群落

この群落は図及び第二表に示す如く、湿原の中央部と北部とにあり、夫々をA、Bで示した。落葉亜灌木の群落で、その湿原中を水が貫流している。ハンノキが優勢であるが、北部ではイソノキがハンノキと同程度に出現して居り、その下生植物としてはカリヤス、ヨシ等が顕著である。

c) イソノキ群落

この群落は安養寺湿原の代表的群落で、第一図の如く、北部のハンノキ群落を囲み、中央部以北一帯にみられるものであり、イソノキを優勢とし、クマザサを下生植物としている。しかし、所々にヤマドリゼンマイが小群落をなして散在していた。群落の周辺への境界はオオミズゴケ分布の境界と類似するが、それよりも広く分布している。

第二表 ハンノキ群落 (5×5m 各5ヶ所)

植 物 名	A		B		植 物 名	A		B	
	頻度	被度	頻度	被度		頻度	被度	頻度	被度
オオミズゴケ	100	5.0	100	5.0	ワラビ	80	0.8	60	0.6
ハンノキ	100	3.5	100	3.2	シロイヌノヒゲ	60	0.8	80	0.6
イヌツゲ	100	3.2	100	4.6	ウメモドキ	60	+	80	+
クマザサ	100	2.8	100	3.4	イヌノハナヒゲ	40	+	80	0.8
カリヤス	100	2.6	80	3.2	ミズギボウシ	40	+	80	+
レンゲツツジ	80	+	100	0.8	サワギキョウ	20	+	80	2.0
ノイバラ	100	+	80	+	ヤマドリゼンマイ	60	1.2	40	+
カキラン	80	+	100	+	カンアオイ	—	—	100	0.8
アカマツ	100	1.4	60	1.4	イ	20	+	80	+
ヨシ	80	+	80	+	サイゴクミツバツツジ	80	+	—	—
イソノキ	40	+	100	3.2	ミヤマアブラスキ	80	+	—	—

第三表 イソノキ群落 (5×5m 5ヶ所)

植 物 名	頻度	被度	植 物 名	頻度	被度	植 物 名	頻度	被度
イソノキ	100	4.7	オオミズゴケ	100	3.5	カリヤス	83	2.5
イヌツゲ	100	4.8	ハンノキ	100	2.0	カンアオイ	83	1.5
クマザサ	100	4.5	シロイヌノヒゲ	100	+	ウメモドキ	83	1.2

B 周辺群落 (クリ群落)

第一図で示している様に、この群落は湿地の東西両側部のオオミズゴケの侵入を見ぬ所の群落で、湿原よりやや高く、黄褐色の土壤で、PHは4.0~4.2の地に生じている群落であつて、第四表の如くクリを優占種とし、下生植物としてよく成育したクマザサが繁茂している。尚、この群落の山林に続く部分には杉が多少散在している。又、この周辺部にはイソノキ、ハンノキを殆ど含まず、ソヨゴ、コバノガマズミ、タガネソウ等の湿地に生育していない植物を生じている。

第四表 クリ群落 (5×5m 5ヶ所)

植 物 名	頻度	被度	植 物 名	頻度	被度	植 物 名	頻度	被度
ク リ	100	4.2	サツキツツジ	100	0.6	ソ ヨ ゴ	80	+
ク マ ザ サ	100	4.0	ウ ル シ	100	+	コバノガマズミ	80	+
イヌツゲ	100	2.0	コ ナ ラ	80	2.4	タガネソウ	80	+
ワラビ	100	1.0	サルトリイバラ	80	+	ノイバラ	60	+

以上の群落構造から見て、本湿原が群落学上興味ある問題をもっている様に思われ、筆者等は更に、本湿原の群落の季節的遷移及び環境条件に就いて、今後も調査を続ける計画である。